

# 伊那谷地名研究会通信

第 42 号

発行日  
事務所

平成二五年六月二〇日  
伊那谷地名研究会

〒399-2102  
長野県下伊那郡下條村陽阜七二〇八



古木に包まれ古代東山道の歴史を伝える「御坂神社」と境内

## 笹本正治先生の記念講演会を終えて

伊那谷地名研究会会長 原 董

平成13年11月、「伊那谷地名研究会」発足より12年が経過しました。この間における会員皆さんの活動の結果は、飯田下伊那地域の研究は勿論、伊那谷地域の地名研究と地域研究活動の大きな成果につながっています。

そして、今回発刊いたしました、『伊那谷の地名』第3輯は、その成果のひとつですが、先般5月18日、今年度の総会に合わせ開催しました「伊那谷地名研究会発足12周年並びに『伊那谷の地名』第3輯発刊記念講演会」開催に当っては、会員皆様のご協力により内容ある開催が由来しましたことを会長の立場よりお礼を申し上げます。ご苦勞様でございました。

特に、信州大学副学長笹本正治先生には、「土地の記憶―地名と歴史―」と題しご講演を戴き、伊那谷地名研究会の新たな活動に向けて、大事なご教示を戴きました。その一文をご紹介させていただきます。

「地名を有効に活用するためには、地名情報をしっかり集めねばならない。解釈におぼれるのではなく、資料としての地名及び地名にまつわると思われるすべての情報採集と整理こそが大事である。今それをしなければ私達は大切な資産を失うことになるであろう。何のために地名を研究し学ぶのか。皆さんの役割は大きい。」

と結ばれました。地名研究への奥深い示唆を学びました。今後の活動に活用させていただきます。感謝を申しあげます。

伊那谷地名研究会設立より活動を続けている会員による研究と、広報活動は、今言われる、「心豊かな地域社会を育む研究」への取組みの一つとして、大事な成果に繋がっています。そして、地域研究の原点である「行政・研究団体・地域」が連携し取組んでいる「伊那谷学」の構築に繋がっています。今回の記念事業を大切に捉え、会員のさらなる活動をお願いします。

伊那谷地名研究会発足12周年並びに『伊那谷の地名』第3輯発刊

記念講演会 「土地の記憶・地名と歴史」

講師 信州大学副学長 笹本 正治 先生



講演をされる笹本正治先生

飯田城下町の地名は町の成立や職業状態などを示してくれるが、その中に職人地名の番匠町がある。松本城下町には二十四小路の中に鍋屋小路、鍛冶小路が見られる。小路のような生活に密着した狭い地名には職人の営みが籠められている。高遠城下町に職人地名はないが、板町村の北部に鍛冶村、建福寺の東の山麓一帯を番匠邑と称した。公として残らない地名の中にも、人々の生活を示してくれるものが多く残っている。松本に鍋屋小路があったが、鍋屋は鍋を造ったり売る商売なので、鋳物師につながる。そこで、本稿では職人の一例として、鋳物師にかかわる地名に触れたい。

江戸時代に多くの鋳物師は下級公家の真継家の支配を受けた。彼らの居住地で職業名とつながる地名だけを抜き出すと、次のようになる。

山城国京三条釜座

(京都市中京区三条通新町西入)

大和国添上郡鍋屋町(奈良県奈良市鍋屋町)

撰津国大坂道頓堀釜屋町

(大阪府大阪市西区南堀江一丁目)

撰津国大坂唐物町老丁目

(大阪府大阪市中央区唐物町一丁目)

伊勢国桑名郡鍋屋町

(三重県桑名市西鍋屋町・東鍋屋町・北鍋屋町)

伊勢国安濃津鍋屋町(三重県津市北丸之内)

三河国宝飯郡牛久保北金屋村

(愛知県豊川市金屋町)

遠江国周智郡森金屋(静岡県周智郡森町森)

伊豆国君沢郡三島金屋町(静岡県三島市金谷町)

武蔵国児玉郡八幡金屋村

(埼玉県本庄市児玉町金屋)

常陸国新治郡真鍋村(茨城県土浦市真鍋)

近江国蒲生郡八日市金屋村

(滋賀県東近江市八日市金屋一〜三丁目他)

近江国坂田郡長浜北金屋(滋賀県長浜市大宮町)

美濃国厚美郡岐阜小熊村(岐阜県岐阜市金屋町)

美濃国厚美郡岐阜鍋屋町(岐阜県岐阜市)

美濃国加茂郡鋳物師屋村(岐阜県関市鋳物師屋)

上野国群馬郡白井吹屋村

(群馬県渋川市吹屋・白井)

出羽国村山郡山形銅町(山形県山形市銅町)

若狭国遠敷郡金屋村(福井県小浜市金屋)

越前国敦賀郡鋳物師村(福井県敦賀市鋳物師)

越前国丹生郡金屋村(福井県丹生郡越前町金谷)

加賀国江沼郡大聖寺鍛冶町

(石川県加賀市大聖寺鍛冶町)

越中国射水郡高岡金屋町(富山県高岡市金屋)

越中国新川郡富山上金屋

(富山県富山市室町通二丁目)

越中国礪波郡半谷郷西部金屋村

(富山県高岡市戸出西部金屋)

越後国頸城郡高田鍋屋町

(新潟県上越市東本町五丁目)

丹波国天田郡福知山(京都府福知山市鋳物師)

但馬国二方郡金屋村

(兵庫県美方郡新温泉町金屋)

播磨国宍粟郡柏野庄金屋村(兵庫県宍粟市金屋)

美作国西条郡津山吹屋町(岡山県津山市吹屋町)

備中国上房郡松山城下鍛冶丁

(岡山県高梁市鍛冶町)

長門国府中(山口県下関市金屋町)

淡路国三原郡金屋村(兵庫県洲本市金屋)

このうち、現在、金屋町と名乗っているものを含めて数えると、三三カ所中で金屋が一六、鍋屋が六、鋳物師が三、釜が二、吹屋が二、鍛冶二になる。すなわち、江戸時代に真継家配下の鋳物師の住んでいた地名を代表するのが金屋なのである。なお、金屋という地名は、日本各地に存在するが、そのすべてに鋳物師が住んでいたわけではない。

金屋とは鉍石を溶かして、その含有物をそれぞれ吹き分ける仕事をするための建物、製鉄所、精錬所のこと、そうした職業に従事する人も指す。吹屋も金属を精錬、鋳造する場から職業名にもなっている。地名の性格において、両者はよく似ているのである。

ということは、本来、精錬などの鉄生産の場に多くの関係する職人、鍛冶や鋳物師などが住

んでいたことになる。鉄は重いので、生産される場に近いほど運送に対する費用が少なく、済む。近隣に住んでいけば、職人が用いるのに適した材質等を確認しに行ける。金属に関わる多くの職種が集まれば、それだけ様々な商品対応もでき、注文者にとっても便利である。さらに、製鉄、鍛冶、鋳物師などは火を使う職業なので、火災を避けるために、一カ所に集中させておくことが、都市計画上で重要であった。こうした理由が重なって、金屋地名の中に鋳物師も住んだのであろう。

もう一つ問題なのは、鍋屋地名が多いことである。鍋屋とは鍋を作ったり売ったりする職業である。鋳物師は梵鐘や釜、鍬など鍋以外にも多くの製品を作るのに、なぜ鍋かという点、製品の中でもっとも売れる、鋳物の代名詞だったからであろう。前近代においては鍋の果たす役割が、釜より大きかったのである。信州ではかつて囲炉裏を中心とした生活が営まれていた。囲炉裏では自在鉤で鍋や鉄瓶などを吊して調理するか、もしくは五徳によって鍋や釜を火の上に置く。その意味では鍋の方が使いやすい。ところが、ガスコンロや電化製品の一般化によって、かつての鋳物製の鍋はほとんど見る機会がなくなり、これを保有している家は稀である。

現在の釜のイメージはご飯を炊くときに用いる炊飯釜であるが、三条釜座で造った釜は茶を沸かすため茶湯釜である。現在家庭に電気炊飯器などはあっても、かつてこの家でも持っていた鋳物製の炊飯器を所有している家のごくわずかしかない。子どもたちには鋳物製の釜を想像することすら難しいかもしれない。こうして、家庭内の炊飯道具も大きく変化しているなか

で、職業地名が今後どのように変わっていくのか、いかにないのかに、私は注目している。

鋳物師が鋳物師の付く地名に住んでいないのは、どうしてなのであろうか。地名の中に番匠や鍛冶屋が多いのに比較すると、鋳物師の地名ははるかに少ない。これは社会でどのような職人が必要とされ、数が多かったのかにつながる。鋳物師の数は番匠や鍛冶より少人数で済んだのである。地名は歴史における社会のあり方をも示している。

さらに、鋳物師の地名であっても、鋳物師が居住していない所もある。鋳物は耐久性があるので、すべての家が日常的に購入するものではない。鋳物製品の壊れたところは鋳掛屋が修復した。鋳物師が定住して商売が成り立つのは大きな町、多くの消費者を抱える場所になる。村などでは鋳物師がやってきて一時的に仕事をし、他所へ移り住んでいくこともあった。その場合、鋳物師の活動した跡に地名が付いた。

地名は人間の活動のもとで名付けられ、時間経過の中で変化し、歴史とともに消えたり生まれたりしている。したがって、現在に残る地名の出発点がどこにあって、最初付けられた時にはどのような意味を持ち、どこを指していたのか、現在はそのような意味に理解され、範囲が変わっていないかなど、考察にあたっては多面的重層的に問題意識を持つことが大事である。

地名は多様な付け方がされているので、それを理解しようとするのなら、人間活動のすべてに対して興味を持ち、広い視野から考えねばならない。地質学や地理学、植物学などのみならず、国語学や言語学の知識も必要だろう。それ

に歴史学、考古学、民俗学といった過去を認識する学問も知っておきたい。

地名学は様々な分野を超えた総合学になるべきである。地名では、独りよがりな解釈と思われるものに接することもあるが、学問になっていくためには、誰もがその通りだと頷けるような説明が必要である。

ともかく、様々な地名が失われつつある今、解釈よりまずは地名の保存が急務である。とりわけ、消えつつある集落や家レベル、個人レベルの地名の記録化・保存が求められる。その際、文字の限界も認識した上で、古い地図や検地帳などを収集することが必要である。景観も地形も変わっていく中で、文字情報では得られないことをも伝える写真や絵の意義は極めて大きいので、これを集めるべきである。

なお、研究する皆さんには、頭の中だけで説明するのではなく、同じ場所に何度も立って五感・皮膚感覚によって地名を認識しながら、客観的に考察することを期待したい。――完――

#### 講師 笹本正治先生をご紹介します。

笹本先生は山梨県甲斐市のご出身、信州大学文学部を卒業、阿南高校教諭、名古屋大学文学部博士課程から人文学部教授、その後信州大学人文学部教授、現在信州大学副学長をお勤めです。ご講演は、地名と人々の関わり、地名は全ての学問に繋がる研究。地名を学ぶことの重要性等、貴重なご講演をいただきました。

本号は講演の中から、先生の著大な研究である、「鋳物師の歴史と地名」を中心に、ご執筆を戴きました。

## 第58回研究発表例会

### 「古代東山道の歴史と地名」

発表者 林 茂伸 会員

開催日 7月13日(土) 午後1時30分  
会場 上郷考古博物館 会議室

#### 発表の概要

東山道沿線に残る主だった地名を元に、その地の歴史を改めて見てみたい。

「東山道」とは大和朝廷が日本の支配のため、1300年前に全国に張り巡らした官道とその地域の名である。五畿七道と言われた日本の地方区分の中で、近江から奥羽(東北地方)まで中部の山間部を縦貫する道・地域が「東山道」であり、近江の瀬田の唐橋を起点に、多賀城まで1000kmを越える険しい山間の道のりであった。阿智村はそのルートがほぼ分かる特別な所である。「東山道」に限らず、古代の官道は計画測量道路として直線を基本としており、佐賀平野では十数kmも直線路が続く例もある。最短距離を取るため、丘陵や条里制田までも無視するかのごとく直線で横切り、上野では小さな古墳さえ一部を破壊する中で建設された道である。道幅は当初12mもあり、時代が新しくなると狭くなったようである。この直線が現在でも市町村の境界線となつている所もあり、侵してはならない線・境として今日まで続く。阿智村にもこの跡とされる直線路がある。

官道には約16kmごとに駅が設けられ、一駅に通常10頭の馬が置かれ公用に供していた。阿智の駅はその3倍、30頭の馬が配置され、「東山道」最大の駅であったことが延喜式によって明らかである。東国の若者が九州北辺の防備のために徴用された防人の道であり、信濃以東の

国で生産された馬を都に運ぶ貢馬(くめ)の道として使われた。恐らく神坂峠を通つたのであるが、毎年馬を都に輸送していたことが記録されている。1300年前の官道「東山道」は、その沿線に相応しい地名を持つている。黒坂周平『東山道の実証的研究』によると、「仙道」「山道」「さんどう(漢音)・せんどう(吳音)」は「東山道」そのものに付けられた名で、この山道に対して海道も記載されており、前者は「東山道(やまのみち)」、後者は「東海道(うみのみち)」の事である。

明治には先道街道と呼んでいたそうで、これにより東山道ルートが浮び上がってきた。滋賀県でも千堂(せんどう・せんと)が2か所はあり、まさしく「東山道」の跡と確認されている。また「東山道」にかかわりの深い地名として、駒場・番(馬)場・沓掛・追分・市・木戸・清水・立石などがあるとされている。ここでは阿智村を中心に、東山道に関連する地名をルート順に拾いつつ、それに関する話を歴史的に掘り下げてみたい。

東山道の歴史と地名について発表戴くのは今回が初めてです。ご参加いただき研究に繋げてください。

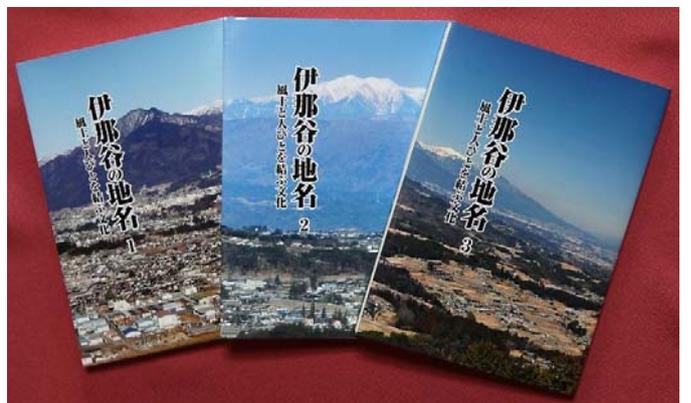
#### 第5回「伊那谷地名講座」

#### テーマ「鈴岡城の歴史と地名」

発表者 下平 隆司 会員

開催日 8月31日(土) 午後1時30分  
会場 飯田市立中央図書館 研修室  
飯田市立中央図書館と共催

どなたでも聴講できます。会員の皆さま、誘い合つてご参加ください。聴講無料。



#### 『伊那谷の地名』第3輯を発刊しました 購入と販売にご協力を!

運営委員と執筆者で販売を行っています。  
お一人2冊以上の購入販売をお願いします!  
第2輯も販売しております。(各輯1800円)  
(問合せ) 原 董 会長 事務局 長 宅

#### 事務局短信

- 年会費を七月メドに納入ください。同封用紙でお振り込みいただくか、例会会場でも受付けます。また近隣の役員か例会参加者にお預けください。会計役員 後藤 澄壽(喬木在住)
- 「地名コラム」原稿をお願いします。多くの会員諸氏が執筆されますようお願いいたします。
- 第2回運営委員会の開催(7・13) 第58回例会の終了後、短時間お願いいたします。
- 第11回地名フィールドワーク(11月)は「千代の自然と歴史・地名」と題して開催予定です。

事務局 中島正韶 電話 一六五(二四)〇一三五  
二三九五・〇〇〇四 飯田市上郷黒田一九七七  
E-mail:nakajimaya2@clock.ocn.ne.jp